４日の作業会の見学で、お目にかかった方から、立ち話で、本の出版のことが出ました。  
その方は、何冊かの学術書をお書きになったようです。  
が、残念ながら、僕には、この方面の学術書を書く能力はありませんし、書こうとも思っておりません。  
僕が書きたいと思っているのは、場合によっては、縦書きの方が、ふさわしいかなと思たりもする、  
ごく一般的な本です。  
  
　以下のようなストーリーで、書きたいと思ってます。  
----------------------------------------------------------------------------------------------  
『 理科離れ』  
　この本は、「理科で遊ぼう会」と云う名前のユニークな会の活動についてのお話です。  
　命名は、この会の創設者である田中氏の強いこだわりを表しており、その趣旨は、以下の通りです。  
　  
　子供たちの理科離れが深刻化している今、子供たちと、理科で、楽しく遊ぶのだ」と云う気持ちで、  
実験や、もの作りをしながら、理科の授業を展開して、子供たちの想像力（創造力）を、かき立てたい。  
   
『理科が嫌いな先生が理科を教えている』  
　子供たちの理科離れが深刻化していると言われているさなか、      
小学校の理科教育で、「理科が嫌いな先生が理科を教えている」と  
云う話を聞き、大変気になります。  
（これって、本当なのでしょうか？　教育現場の現状に暗いもので、定かではありませんが）  
  
　理科の嫌いな先生が理科を教えて、授業が面白いわけがない。  
　子供は、敏感です。「この先生、理科が嫌いなんだな」は、一瞬のうちに、感じ取ります。  
  
　嫌いなことを、義務感にかられて、何とか、こなさなくてはならない先生方もさることながら  
理科の嫌いな先生に、理科を教わる子供たちも可哀想。  
  
『「理科で遊ぼう会」の授業』  
　これに対して、「理科で遊ぼう会」では、理科大好きなシニアのおじさん、おばさんが  
教えるのだから、こちらの方の授業は、断然、面白い。  
いやいや教える先生と理科が好きで、嬉々として教える先生とでは、子供達の反応がまるで違う。  
　理科好きで、経験に基づいた知識の豊富な、おじさん、おばさんの情熱に、  
想像力（創造力）を触発され、目を輝かせる子供達が、目に浮かんできます。  
（実際、後日、子供たちから、「こんな授業は、はじめてです、面白かった。」との手紙が届いたりします）  
  
『手作り教材』  
　しかも、 教材は、手作り。   
　授業で、使う、モーター組み立てキットは、おじさん、おばさんたちの手作りです。  
　この点が、また、大切なところです。  
「坊や、驚いたか、これ、おっちゃん達が、考えて作ったんやで！！」  
「すご〜い、おっちゃん、やるじゃん！」って会話が聞こえて、きそうです。  
  
『科学技術立国』  
　資源の乏しい我が国は、なんのかんのと言っても、自分たちの頭（頭脳）を最大限、駆使して生きて行くよりありません。  
　子供たちの理科離れは、次世代の科学技術を担う若者の枯渇を意味し、我が国の国是とも云うべき、  
科学技術立国の根底が揺らいでいると云うことです。  
   
　これに対する有効な策が見出せないまま、言わば放置されているのでは、ないだろうかとの危惧を抱いています。  
  
『人作り、教育投資』  
　今、さかんに、人作り、そのための教育投資の必要性が叫ばれてます。  
　どんな人を作るのか？　  
  
『少子高齢化と人手不足』  
　今年の就活では、新卒者の売り手市場だそうです。  
　これでは、十分な、教育投資があったとしても、小学校理科教育の現場を、  
理科好きの先生で、埋めるのは、なかなか大変だし、時間もかかる。  
  
　欧米先進国のAIをはじめとする技術革新は増す増す、急速であり、  
一方、中国をはじめとする新興国が激しく追い上げてきています。  
　我が国が、まずい理科教育のせいで、科学技術立国を支える若者が、  
いなくなってしまうような事態は、何としても避けなければならない。  
  
　おりしも、日本の高度成長を担った方々が、続々退職されており、しかも、お元気です。  
　この中で、技術者や、科学者として活躍された方で、退職後もお元気で、意欲的な方を、活用しない手はありません。  
　小学校の教育免許を持たない、方々に、教育現場に立ってもらうには、それなりに問題があろうかと思いますが、  
そこは、それなりに制度的な工夫をする必要がありますが。  
  
　この手の人材活用は、我が国だからできる手法であり、他の国では、人口動態も事情も異なり真似はできません。  
「理科で遊ぼう会」の活躍は、その一つの典型を示していると思います。  
  
『「理科で遊ぼう会」の実績』  
　「理科で遊ぼう会」は、「出前授業」と称して、小学校へ、出かけての授業とか、  
「寺子屋」と称しての、地元の公民館を利用しての、理科を題材とした、お遊びとかで、  
すでに、ここ数年間の子供たちへの理科教育の実績があります。  
　数年間、手応えを感じて、続いていることは、範囲が限られた地域とはいえ、社会の共感、賛同を得ている、  
証拠です。  
  
『「理科で遊ぼう会」の活用』  
　「理科で遊ぼう会」のような会が、小学校の理科教育に、日常的に用いられるような社会的な枠組みができることを望みたい。  
  
が、それは、従来秩序の改変であり、行政の高い壁が立ちはだかっていそうである。  
  
　日本を代表するの大企業も国際間の変革のスピード競争に負けて、青息吐息状態の会社が散見される。  
　国家レベルの人材養成競争も、形式にこだわっていては、遅れをとる。  
  
　このままでは、次世代の科学技術を担う若者が枯渇して、国家間競争に敗退する危機が迫っています。  
　「理科で遊ぼう会」の活動を世間に広く認知してもらい、「理科で遊ぼう会」のようなものを  
最大限に活かした、素早い「民活」で、この難局を乗り切りたいものです。  
---------------------------------------------------------------------------------------------------  
  
　まぁ、そんな願いを込めて、この本を書きたいと考えています。